

エルデニゾー僧院に残存する ガンザイ・ズラクについて

小野田 俊蔵

1. 供養画「ガンザイ・ズラク」

「ガンザイ・ズラク」とモンゴル語で称されている宗教画は、チベット語では「カンゼー(tib.) bskang rdzas」と呼ばれる図様を起源とするもので、「カンソ(tib.) bskang gso」と名付けられる儀式で使われるものであるとされる。カン「(tib.) bskang」という言葉はコンワ「(tib.) skong ba(心を満足させる)」という動詞から派生した言葉であり、ソ「(tib.) gso」とは「手当」あるいは「養生」を意味する。つまりこのカンソ儀礼は守護神や護法尊を満足させ、猛き心が衰退することを防止するための供儀である。そのため通常の仏菩薩への供養とは少々異なり犠牲の要素をも含むものである。

一般に供養物には様々な観点からの分類がある。例えばチエンゼー(捧げもの)(tib.) mchod rdzas と称されるものには、八吉祥印や五感の供養物などが含まれ、チエンゼー(御覧に供するもの)(tib.) spyen rdzas と称されるものには、守護神等の御目を楽しませるもの、例えば様々な動物も含まれる。またダムゼー(御法具)(tib.) dam rdzas と称される法具類、例えば金剛鈴 dril bu や金剛杵 rdo rje など重要な供養物である。また、供養物の中には供儀を受ける尊格の衣装や獣座などの乗り物も含まれるのでそれがどんな尊格へのカンゼー(供養画)であるかも大凡判断出来る。

さて、モンゴル帝国時代の古都カラコルムの地に建立されたエルデニゾー(Erdenezuu)僧院の域内に「gorban-zuu ゴルワンゾー(三寺)」と称される寺院がある。その境内にはその名の元となった三棟の本堂が建つ地面より一段低い土地つまり最も東寄りの門を入ってすぐ脇の左右に二棟の



図1 エルデニゾー僧院全景



図2 ゴルワンゾー寺

仏堂があって、その仏堂の壁面にこの「ガンザイ・ズラク」が保存されている。両堂とも3室に分かれているが「ガンザイ」がある壁は左側東端の室の両面と右側中央の室の両面と右側西端の部屋の東面の合計5面である。

南側つまり門を入って左側の仏堂は「zabee-zom ザンベーズム」と呼ばれ、zamba ザンバ(ジャンバラ (tib.) jambhala) を祀る御堂(ザンベーズム)であるという。

エルデニブー僧院に残存するガンザイ・ズラクについて



図3 ザンパー堂



図4 アユス堂

北側つまり門を入って右側の仏堂は「ayus-zom アユスゾム」と呼ばれ、無量寿仏(アミターユス(skt. Amitāyus)を祀る御堂とされている。

壁面の壁画は両堂ともほぼ同じ大きさで横が4m15cm 程、縦は「ザンパーゾム」の方は1m95cm 程、「アユスゾム」のものの縦は1m85cm 前後である。両堂ともそのガンザイの壁面にはガラスの保護板が被いその支柱等やガラスの影響で写真も鮮明に撮影することは難しい。部屋自体の幅が3m 程な



図5 ザンパー堂東壁



図6 ザンパー堂西壁



図7 アユス堂西壁



図8 アユス堂東壁

ので保護板がなくても全体を収める撮影は難しいと思われる。

当該の堂宇が最初に建造されたのは1774年から1784年にかけてで、その後1881年に修復事業が行なわれたという記録がある。その後、これらのお堂の修復は1940年代から1970年代にかけて数回行われているということであるが、正確な記録は残っていない。1990年代に Center for Cultural heritage of Mongolia によって調査と若干の修復が行なわれたようだが、確認は取れていない。ガラス保護板は2003年あるいは2004年に施されたと説明を受けたが作業前の写真は現地にはなく、あるいは Center for Cultural heritage of Mongolia に残されているかも知れない。軸装仏画のパネル化も1994年のことだという説明を受けたが確認は取れていない。

2. ガンザイ画の要素

モンゴル国内にはこの作例以外にも多くのガンザイ画が残されており「ザナバザル名称美術館 Zanabazar Museum of Fine Arts」の中にも3面のガンザイ画が展示されている。1面はアップリケ作品で写真は [Oktyabri Dash, *Mongolia Photo Album*, p.240] で確認する事が出来る。

他の2面は地方の寺院跡の壁画を壁面ごと収容し Center for Cultural heritage の技師の力で修復したものである。



図9 ザナバザル名称美術館所蔵のガンザイアップリケ作品

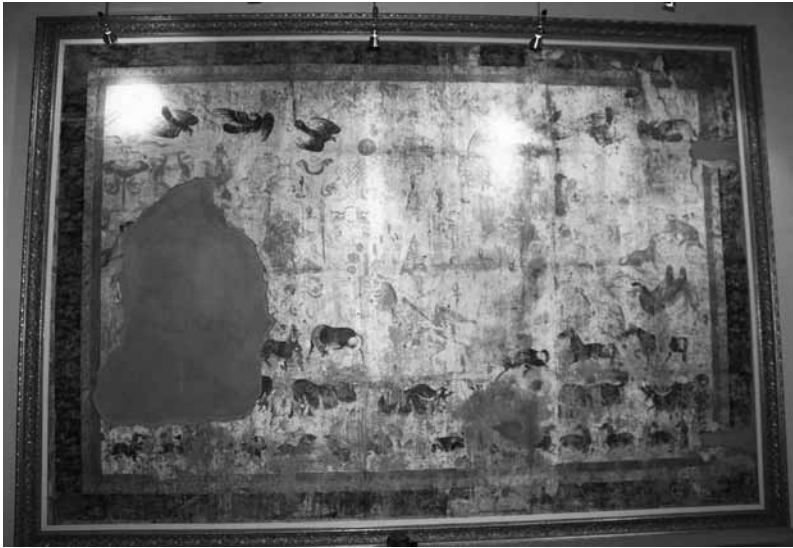


図10 修復されザナバザル名称美術館に運ばれたガンザイ壁画

ガンザイ画の諸要素については幾つかの紹介論文がある。また、独自に修されるカンソ儀規が幾つかの僧院では伝えられていたようで、一部のテキストは写真複製されている。それらを参照しつつ各要素を吟味してみたい。

一般的にガンザイ画の要素としては、そのガンザイ画がどの尊格への供物であるのかに拠るが、主尊とその明妃の持物がすべて描かれる。衣類や持物や装飾品はあたかもそれが着けられたり持たれたりしているかの如く、通常の尊格描写から尊格の身体のみが抜け出したかのように描かれる。

次に尊格への供え物が列記される。いわゆる *mchod rdzas* チュンゼー(捧げもの)である。顔を洗う水(忿怒尊の場合は時として血)や足を洗う水(あるいは尿)、花々(忿怒尊の場合には人間の目玉や臓器)、香煙(あるいは焼かれた肉から出る煙)、灯火(人間の脂肪の油の灯)、香水(べつとりと凝固しかけた血)、食べ物(人肉を含む五種類の肉)、楽器(人骨で作った笛や頭蓋骨の太鼓など)、トルマと呼ばれる供物(頭蓋骨の器に盛られや太陽

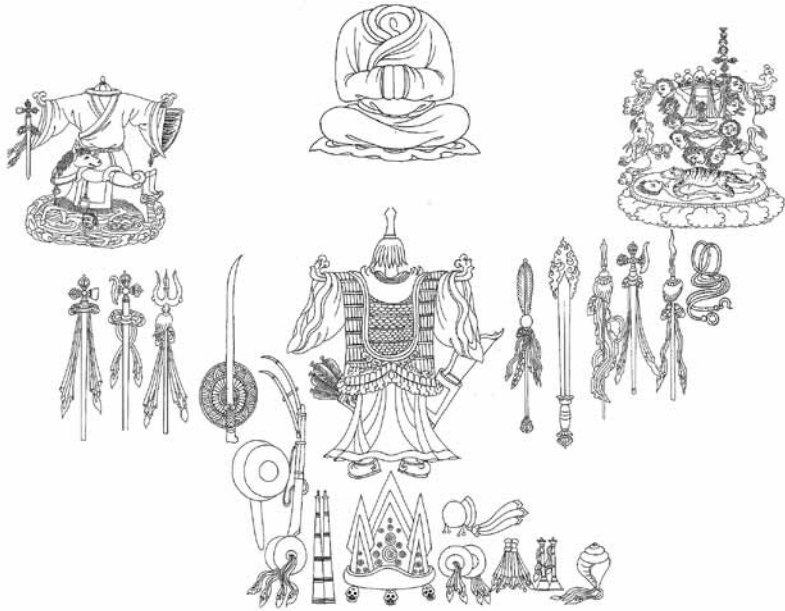


図11 衣類や持物のお供え

や月や炎を添えた金剛厥や十字金剛杵と共に描かれる)等である。

前述したように持物のお供えの中には当然のこととして、忿怒尊が使用する dam rdzas ダムゼー(御法具)があり、その中には武器 mtshon 類も含まれる。

またガンザイには尊格自体が描かれることは普通ないが、供養天女に関してはそれ自身が供養の資具であるので例外的に尊格自体が描かれる。一般的には八供養女あるいは十六供養女とよばれる天女群である。

ガンザイのほぼ中央には、須弥山の詳細が描かれるが、これも世界全体をお供えするという意味であり、御目を楽しませるための供養物 spyan rdzas チエンゼー(御覧に供するもの)であるとも説明される。前述したようにチエンゼーには翻がえる旗や集う動物たちも含まれる。例えば、犬や羊、ヤクや馬である。特定の尊格のための供養では各動物の数はそれぞれ13頭と定められていたと伝える資料もあるが理由については定かではない。

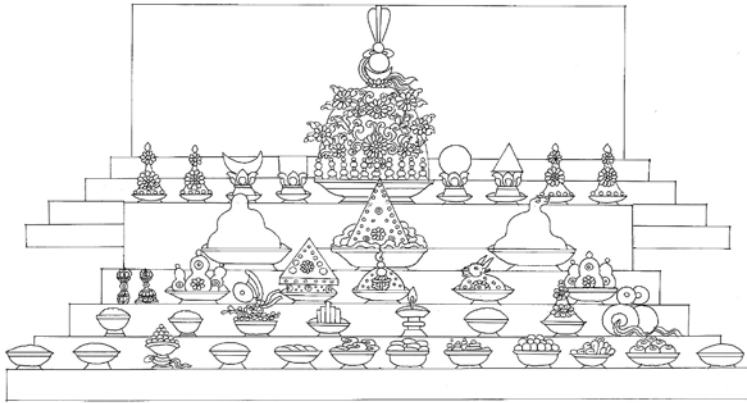


図12 供養机

供養机(mchod lcog)の上の器には次のようなお供えが用意される伝統がある。乳木と呼ばれる木の枝、この小枝は、等しい長さに揃えられて、両端は、はちみつとバターに浸されている。ゴマ(til) / ミルクに浸した茅草(dur ba) / 大麦(nas) / 米 / 小麦粉(so zan)をミルクで溶いたもの / クシャ草(ku sha) / 白芥子の種子(yungs dkar) / 豆(sran ma) / 大麦(so ba) / 小麦(gro) / 灯明用のバター(shun mar) / 洗顔用の水 / 洗足用の水 / 供花 / 香 / 灯明 / 香水 / 食物である。別の机の上には水を含むホラ貝 / 聖水の入った壺 / 米を持った器が供えられる。

3. アユスゾムのガンザイ

アユスゾムのガンザイは3室あるうちの中央の室の両壁面に描かれている。奥(北)に向かって左の壁のガンザイの中央には須弥山が描かれその左上方には'dod yon lnga (五欲を満たす供養物)と sgra snyan (音楽供養)が並べられている。

右上方にはrgyal srid sna bdun (七種の世俗の宝)と通称される'khor lo rin po che (輪宝)、nor bu rin po che (珠寶)、btsun mo rin po che (王女)、blon po rin po che (臣宝)、glang po rin po che (象宝)、rta mchog rin po

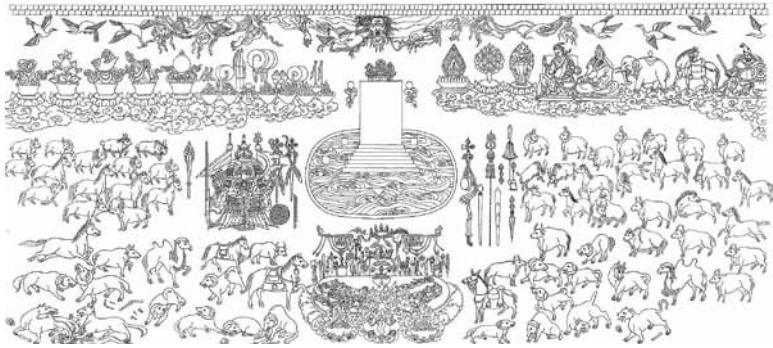


図13 アユス堂西面

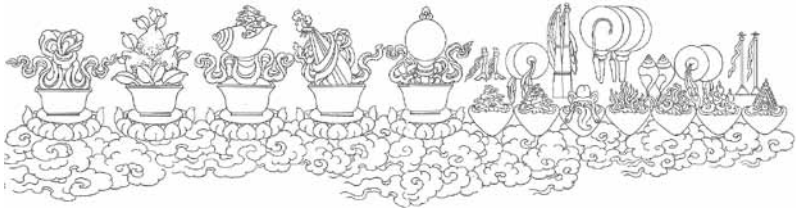


図14 五欲を満たす供養物と音楽供養



図15 七種の宝

che(馬宝)、そして dmag dpon rin po che(將軍宝)が並べて描かれている。

中央の須弥山の左右と下方には衣装や持物が並べて描かれ、残余の空間には多くの動物が描かれている。動物の中には乗用の鞍を着けた馬もいるが、その他の動物は犬が赤い首輪を着けている以外は自然の姿で描かれ、犬やオオカミは人肉をあさっている。

向かって右の壁(アユスゾム東面)のガンザイの中央にも同じく須弥山



図16 アウス堂東面



図17 吉祥の八種のお供え



図18 八吉祥印

が描かれ、その左上方には bkra shis rdzas brgyad (吉祥の八種のお供え) と通称される me long (鏡)、ghi vam (牛黄)、zho (酪)、dur ba (茅草)、bil ba (木瓜)、dung dkar g-yas 'khyil (右旋回法螺貝)、li khri (黄丹)、そして yungs dkar (白芥子) が並べられている。右手上方には、bkra shis rtags brgyad (八吉祥印) つまり gdugs dkar (宝傘)、gser nya (金魚)、



図19 縁取り垂珞



図20 動物と屍体

bum pa (宝瓶)、pad ma (蓮華)、dung dkar (白法螺貝)、dpal be'u (吉祥結)、rgyal mtshan (宝幢)、そして 'khor lo (宝輪) (八吉祥印の図)が描かれている。

中央の須弥山の左右と下方には衣装や持物が並べて描かれ、残余の空間には右壁面と同じ様に多くの動物が描かれている。

ガンザイの周囲はあたかも壁面がタンカ(軸装画)であるかのように布地模様の縁取りが描かれ上面には飾り布(tib.) rgyan yog も描かれている。環珞状に垂れ下がるように描かれる人体の内臓等を鳥類が啄んでいる様子(環珞状の内臓の図)は犬やオオカミが喰いつている肉や人骨などと共に異様な印象を演出しこれらの供養物が忿怒尊や武神への供養であることを強く意識させる。

アユスゾムという名が示す通り、現在の主尊は無量寿仏で、ガンザイの

描かれた壁面の部屋にも無量寿仏のタンカ(軸装画)が祀られている。しかし、ガンザイが本来は守護尊を供養しその闘争心を鼓舞する目的を持つことから、ガンザイと現在の主尊との関係は希薄である。ガンザイを持つ両堂が寺院の門の左右に位置し、かつ財神としてのザンバ(ジャンバラ)神が左手に祀られていることを加味すると、右手に祀られるのは、武神であることが自然ではある。上記したようにガンザイは持物や衣装など祀られる尊格のものが描かれるために、その祀堂の主尊がほぼ特定できる。アユスゾムのガンザイが示す特徴は、明らかに武神への供物であり、特に衣装や持物の特徴からは、その持ち主が忿怒尊であることを示している。アユスゾムという堂名ではあるが、当初は特定の忿怒尊を祀るお堂ではなかったかと推測されるのである。

4. ガンザイに描かれる武器や防具

武神に対する供養物という意味合いから、武神のガンザイ図には多くの武器や防具あるいは馬具が描かれる。「ザンベーズム」のガイザイ図(ザンベーズム東面と西面)にも、武神が身に着ける鎧や兜そして剣や槍など多くの武器や馬具などが描出されている。

チベット・モンゴル地域で実際に使用された武器や防具についての

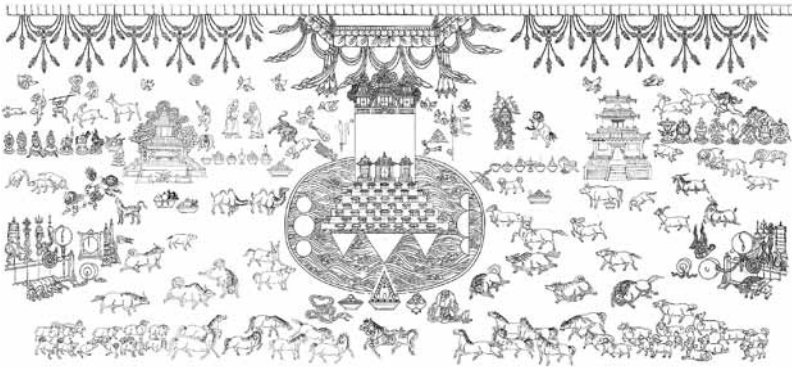


図21 ザンベー堂東面



図22 ザンベール堂西面

名称の体系的な知識の一端は、16世紀の博学者タシ・ナムギエル Tashi Namgyal によって書かれた博物誌 *'jig rten lugs kyi bstan bcos las dpyad don gsal ba'i sgron me zhes grags pa* によって知る事が出来る。Cf. Donald J. LaRocca, *Warriors of the Himalayas, Rediscovering the Arms and Armor of Tibet* (2006).

博物誌の著者タシ・ナムギエルは同書第10章に武器としての刀剣類を列記する。それによると、1)9種の *sog po* 類、2)9種の *zhang ma* 類、3)6種の *hu bed* 類、4)12種の *gu zi* (*dgu zi*) 類、5)13種の *'ja' ral* 類というように支分を含めると合計で50種以上の刀剣の名称を挙げている。

また同書第11章には鎧の種類を列記し、1)9種の *rgya byi* (*rgya dbyi*; *rgya yi*)、2)20種の *dmar yu* (*dmar g-yu*)、3)13種の *'bal* (*'ba'*)、4)7種の *g-ya' ma*、5)3種の *me ru*、6)3種の *skya chen*、7)3種の *li ding* (*li ting*; *li thing*) の合計で支分を含めると60種以上の鎧のタイプを列記している。

同じく第12章で兜を分類し、1) *li ma*、2) *gzha' ma*、3) *gzha' ri*、4) *sul mang*、5) *mi nyag rmog*、6) *rnam rgyal rmog*、7) *dkar leb*、8) *mdze rmog*、9) *ur rmog*、10) *spung gdong* の10種を列記している。

これらの武具名称の多くは前述したカンソ儀礼の儀規書にも列記されるがそこに列記される名称と実際のガンザイ図、そして博物誌に分類列記される武器や武具の分類枝との対照作業は未だ行われてはいない。参考まで

に以下に示すものは或るカンソ儀礼儀規書の一節である。

(Dkon mchog lhun grub Ngor chen, *Nag po chen po' i gtor chog dang skang gso*, 104b2)

ral gri rtse gsum mdung thung dang/ spu gri gseg shad chu gri dang/ 'phang mdung thag mdung mdung ring dang/ lba mda' lcug mda' mda' po che/ gzhu dang phur bu dam shing dang/ dgra stwa gtun shing lcags kyu dang/ dbyug pa stwa re la sogs pas/ ma ha ka la'i thugs dam bskang/

ral gri (剣)と rtse gsum (三又戟)と mdung thung (短槍)と、そして spu gri (剃刀)と gseg shad (短剣)と chu gri (小刀)と、そして 'phang mdung (投げ戈)と thag mdung (綱つき矛)と mdung ring (長鉞)と、そして lba mda' (鉄棒)と lcug mda' (鋤=もり)と mda' po che (ヤス)と、gzhu (弓矢)と phur bu (厥)そして dam shing (打棒)と、dgra stwa (鉞=まさかり)と gtun shing (杖)と lcags kyu (鉤)と、そして dbyug pa (棍棒)と stwa re (鞭)等々 [の武器類の供養] によってマハーカーラの御心を満足させるのである。

ここで注意したいのはタントラの尊格が持物として携える法具は基本的にインド起源の儀規に登場する武器であって現実にチベットやモンゴルで武器として使われたものは少ない。例えば、ヴァジュラ (*vajra*; rdo rje; 金剛杵)、十字金剛杵 (*viśva-vajra*; rdo rje rgya gram)、金剛鈴 (*ghaṇṭā*; dril bu)、金剛厥 (*kīla*; phur pa)、カトヴァーンガ (*khaṭvāṅga*; kha ṭwām ga)、ダマル太鼓 (*ḍamaru*; rnga chung)、剪刀 (*kartari*; gri gug)、三又戟 (*triśūla*; rtse gsum)、棍棒 (*daṇḍa*; dbyug pa, be con)、索 (*pāśa*; zhags pa)、鉤 (*aṅkuśa*; lcags kyu)、斧鉞 (*paraśu*; dgra sta, sta re)、鎚 (*mudgara*; tho



図23 金剛等の法具(左端から本文の順)



図24 鎧等の武器類

ba)、輪(*cakra*; 'khor lo)などは現実に武器として使用されたものは少なく、忿怒尊たちが煩惱の象徴としての魔を退治するための象徴的な法具であって、恐らく描いた絵師たちもあくまで法具としてそれらの形状を知っているのみであると判断される。したがってガンザイ図上には観念的なものと現実的なものとの二種が混在していることを見落としてはならない。

因みに、アユスゾム西面およびアスゾム東面には、武器の一つとして銃が描かれている。

17世紀末から19世紀末までチベット地域で使われたチベット銃(*me mda'*)である。メトロポリタン博物館には実用品ではない忿怒尊への供物用と思われる模型のチベット式短筒銃が所蔵されているがその形状とアユスゾム東面のガンザイ図に描かれる供物用の銃の形状は極めて近い。

ガンザイ図中に描かれる防具あるいは馬具等について、出土考古品との



図25 メトロポリタン博物館所蔵のチベット銃



図26 ガンザイ壁画中の銃

関係の考察も今後の課題としてはあるだろう。ただし、このような現実的なものでさえ、ガンザイ図を描いた絵師によってその描かれた当時の姿が正確に観察記録されたものであることは稀で、むしろ絵師修行時代に学習の一環として行われる模写作業の元絵すなわち、より古い時代の姿の反映であるし、また、絵の師匠から伝えられたパターンの繰り返しであることのほうが多いものと判断されるので、時代考証の意味をそこから導き出すことは難しい。参考までに、チベット語では rgya byi と称される中国式の鎧の出土品(付図27)と「ザンベーズム zambee-zom」西面のガイザイ図に描かれている鎧との形状の類似を確認されたい。



山東・齊王墓第五号随葬坑(復原図)

図27 山東から出土した鎧



図28 ガンザイ壁画中の鎧

5. 絵画構成についての付言

すでに述べてきたように、供養物のみを描くので尊格自体が登場することがないというのが、ガンザイ絵画の最大の特徴であろう。したがって絵画構成としては収束点を持たず、俯瞰的で散然とした印象をすべてのガンザイ画は鑑賞者に与える。しかしこれは、別の観点からみれば、草原の中に散在する動物や人物を観るモンゴル人の伝統的視線に近いものとも言える。20世紀の偉大なモンゴル画家であるシャラブの「モンゴルの四季」に



図29 「モンゴルの四季」(シャラブ作)

代表される構図に共通するものを我々はそこに発見することが出来るであろう。

また、仏画でありながら多くの動物の生き活きとした姿が描かれ、また、仏教教義には存在しない「犠牲(いけにえ)」の要素を合わせ持つガンザイ画がモンゴル人たちに好まれた理由についても、それが牧畜を主な生業としシャーマニズム的な信仰要素を持ち続けたモンゴル人の生活とどのような関連を持つのか、人類学的な考察が必要であると思われるのである。

キーワード：エルデニゾー僧院、ガンザイ、供養画、モンゴル、法具

〈付記〉

本稿は、大谷大学松川節教授が研究代表となった日本学術振興会科学研究費(基盤A)「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究——過去の復元から未来への保存へ」プロジェクトの一環として研究協力を行ない、2011年9月にモンゴル国エルデニゾー博物館で開催された国際研究集会「International Conference on “Erdene-Zuu: Past, Present and Future”」に於いて発表した原稿(英文)に基づき邦訳をした上で一部を改変し増補したものである。壁画の白描起こしに際してご助力いただいたタンカ絵師の城野友美氏に感謝します。

〈資料〉

(チベット語文)

Ngor chen dkon mchog lhun grub, *dPal nag po chen po'i gtor chog dang bskang gso*, Gangtok : s.n., 1967?. 104 folios. On boards: Cover title: *nag po chen po'i gtor chog dang bskang gso*. Set 1-3. LMPj-010732. R-912.

Bya 'jam dbyangs bkra shis rnam rgyal, *'Jig rten lugs kyi bstan bcas las dpyad don gsal ba'i sgron me zhes grags pa*. In Donald J.LaRocca, *Warriors of the Himalayas*, Rediscovering the Arms and Armor of Tibet (2006), pp.253-263.

(欧文)

Pratapaditya Pal, *Art of Tibet, A Catalogue of the Los Angeles County Museum of Art Collection*, University of California Press, 1983.

Ferdinand Lessing, *Yung-ho-kung: an iconography of the Lamaist Cathedral in Peking with notes on Lamaist mythology and cult*, Stockholm, 1942.

'Jigs med chos kyi rdo rje ed., *Bod brgyud nang bstan lha tshogs chen mo*, mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 2001.

Donald J.LaRocca, *Warriors of the Himalayas, Rediscovering the Arms and Armor of Tibet*, The Metropolitan Museum of Art, 2006

(邦文)

小林謙一『東アジアにおける武器・武具の比較研究』奈良文化財研究所(平成16年度～平成19年度基礎研究C 科学研究費研究成果報告書)2008.

楊泓著(来村多加史訳)『中国古兵器論叢』関西大学出版部刊 昭和60年.

小長谷有紀・楊海英編著『草原の遊牧文明』千里文化財団 1998.